

北方町文化財報告書第3集

はやひのみね  
**速日峰地区遺跡Ⅱ**

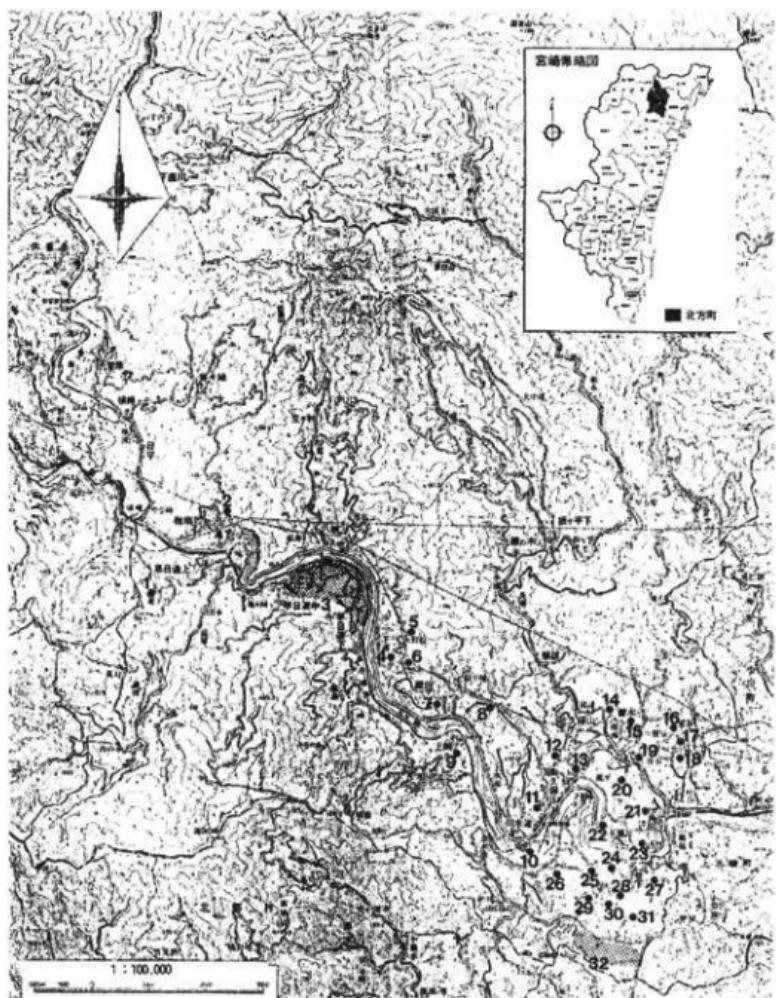
平成3年度県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1992年3月

宮崎県東臼杵郡北方町教育委員会

## 速日峰地区Ⅱ遺跡正誤表

頁	行	誤	正
例言		10. ....図面	10. ....図面
4	10	土壠.....土壤	土塙.....土壤
13	4	甕洞部分	甕洞部片
14	15	以	以下
15		24 VI層遺物出土状況	V層上面遺構検出状況
18	12	つの	2つの
21	22	40無文	40は無文
28	6	矢野原地区で	矢野原地区における
28	14	進める区で	進める上で
28	16	13例である	13例目である



1 連日峰地区道路および周辺道路 (1 / 100,000)



アカホヤ層下集石造構断面



石組造構（？）検出状況

## 序

北方町教育委員会では、東臼杵農林振興局の委託を受けて、  
平成2年度から早中・早下地区内に所在する速日峰地区遺跡の  
発掘調査を行っています。今年度は、早中地区2ヶ所、早下地  
区1ヶ所を調査致しました。

調査の結果、縄文時代の集石遺構・組石遺構や古墳時代の住居  
跡をはじめ各時代の土器・陶磁器・明鏡等を多数発見するこ  
とができ、当時の人々の暮らしやその地域での文化の形勢過程を  
知る上で貴重な資料を得ることができました。

調査にあたり、御協力をいただいた関係機関ならびに関係者  
の各位に対し厚く御礼申しあげるとともに、本書が文化財に対  
する認識や理解のため、また、研究の資料として活用されるこ  
とを願うものであります。

平成4年3月31日

北方町教育委員会

教育長 河井行雄

## 例　　言

1. 本書は、速日峰地区県営は場整備事業に伴い、平成3年5月10日より平成4年3月31日まで実施した埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、東臼杵農林振興局の委託を受けて、北方町教育委員会が実施した。
3. 現地の実測図は小野信彦・黒木小夜子・佐藤きみえ・田口真理子（北方町）が行った。
4. 遺構・遺物は小野が撮影した。
5. 遺構・遺物の実測図・トレース等は主に小野が行い、佐藤きみえ・黒木小夜子・田口真理子・西村有子の協力を得た。
6. 石材の鑑定に関しては、足立富男氏（門川町）・宍戸章氏（宮崎市）・松田正利氏（延岡市）の御教示を受けた。
7. 本書に使用したレベルは海拔高で、方位は磁北で示した。
8. 本書の執筆は各担当者が、編集は小野が行った。
9. 越字は本田正雄氏（北方町教育委員会）の揮毫による。
10. 出土遺物や写真・図画については北方町教育委員会で保管している。

## 目　　次

I	はじめに .....	(小野) 1
II	調査の内容	
1.	X区の調査 .....	(長友) 4
2.	XI区の調査 .....	(小野) 6
3.	XII区の調査 .....	(小野) 14
III	おわりに .....	(小野) 28

# I. はじめに

## 1. 発掘調査に至る経過

宮崎県東臼杵農林振興局では昨年度に引き続き、早中・早下地区でのほ場整備事業を実施する為に、宮崎県教育委員会に工事予定地区の埋蔵文化財の有無についての照会を行った。これを受けて宮崎県教育委員会では、平成3年3月11日より15日まで平成3年度工事予定地の試掘調査を実施し、4ヶ所で遺跡の存在を確認した。

北方町教育委員会はこの結果をもとに、東臼杵農林振興局と遺跡の取り扱いについて協議したが、工法変更等による遺跡の現状保存は一部を除き不可能となり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は東臼杵農林振興局の委託を受けて北方町教育委員会が、平成3年5月10日より平成4年3月31日まで実施した。

当初XII区は調査対象地であったが、東臼杵農林振興局との協議により、遺跡が残ることになった。

## 2. 調査の組織

調査の組織は以下の通りである。

調査主体 北方町教育委員会

教 育 長 河 井 行 雄

社会教育課長 三 浦 弘

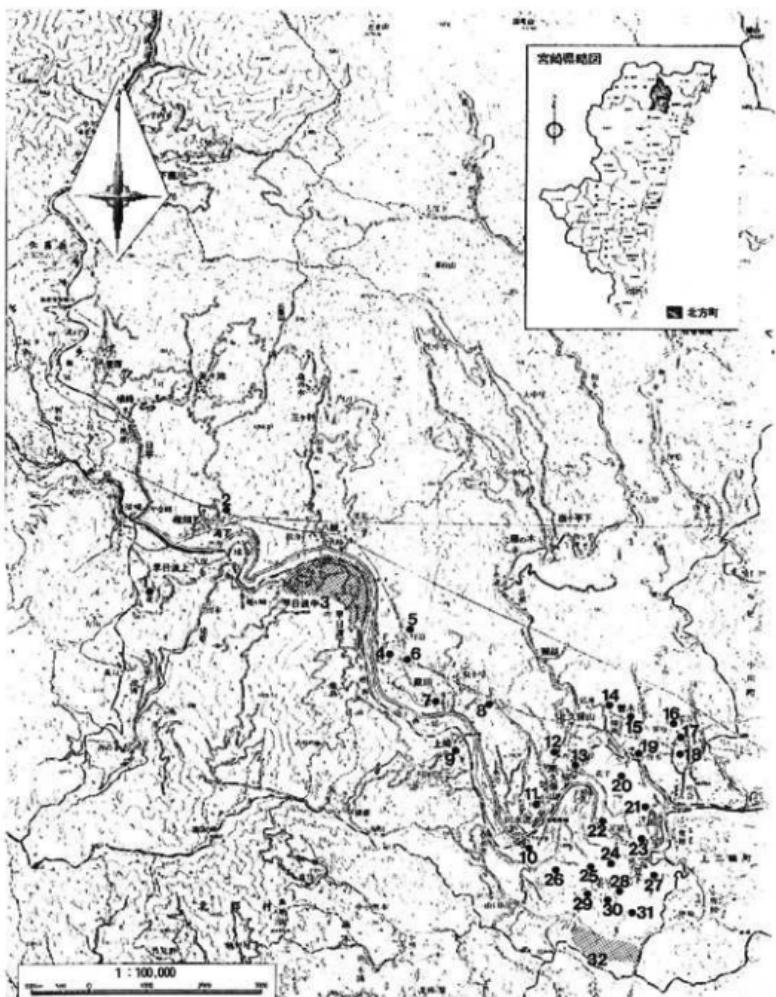
社会教育課長補佐 永 田 信 義

社会教育課主事 小 野 信 彦

宮崎県文化課長 友 郁 子

また、発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々に多大な御教示・御協力をいたいた。記して感謝致します。（順不同）

宮崎県東臼杵農林振興局農地整備課、橋 昌信氏(別府大学)、柳沢一男氏(宮崎大学)、宮崎県文化課埋蔵文化財担当者各位、近藤 協氏(宮崎県総合博物館)、永友良典氏・戸高真知子氏(宮崎県埋蔵文化財センター)、宮崎県市町村埋蔵文化財担当者各位、池田洋子氏・沢賀臣氏(北川町)、九州旧石器文化研究会会員、縄文文化研究会会員、速日峰土地改良区、矢野建設及び地元関係各位。



1. 荒平道跡      7. 霧田道跡      14. 仲畠道跡      20. 年の神石塁群  
 2. ジウモチ谷道跡      8. 鳥小里道跡      15. 後藤木古墻  
 (県史: 多木道跡)      9. 上峰道跡      (旧: 北方村古墻)  
 3. 速日峰地区道跡      10. 川水流道跡      16. 荒谷道跡      21. 権現山道跡  
 4. 久野原小平道跡      11. 東原道跡      17. 黄木原道跡      22. 足鍋道跡  
 5. 矢野原石塁群      12. 十頭ヶ尾道跡      18. 黒仁三道跡      23. 角田上原道跡  
 6. 霧田裏細石塁群      13. 南久保山小堀町道跡      19. 下曾木道跡      24. 岩土原道跡  
 25. 上田下道跡      26. 中山道跡  
 27. 松尾原道跡  
 28. 伊木原道跡  
 29. 笠下風原道跡  
 30. 笠下下原道跡  
 31. 笠下炭越道跡  
 32. 笠下道跡

1 速日峰地区道路および周辺道跡 (1 / 100,000)



2 調査区位置図 (1 /10,000)  
I ~ XI区 平成2年度調査 (M区は未調査)  
X ~ XII区 平成3年度調査 (XI区は未調査)

## II. 調査の内容

### 1. X区の調査

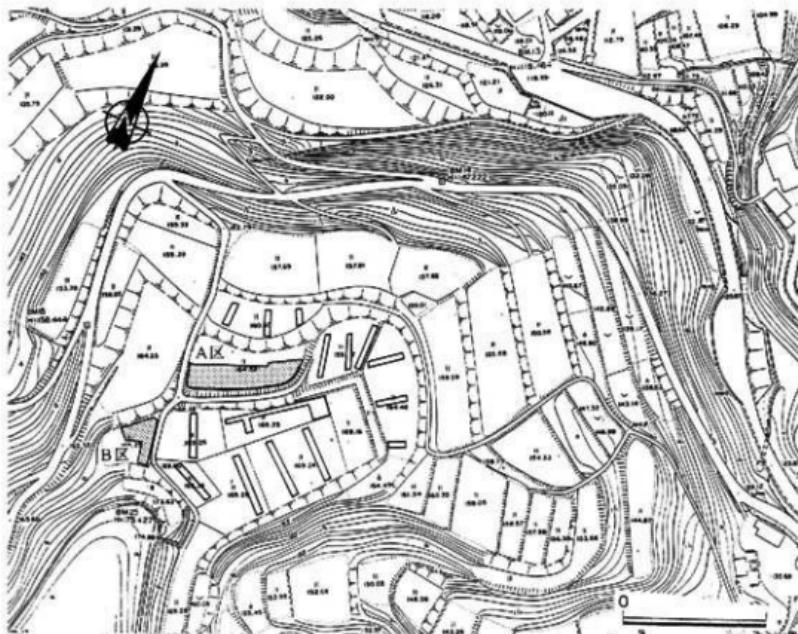
#### (1) 調査の概要

調査は、県営は場整備事業により切り土となるところを中心として調査区を設定し、各調査区にトレンチを設けた。

A区とB区以外の調査区では、表土を剥いだ直下から無遺物層が出るなど、これまでの小規模な造成工事により遺跡が破壊された所も多いと考えられる。

A区では、最初に設けた3本のトレンチから縄文時代を中心とする遺物が発見されたため、削平により遺物包含層が失われているところを除いて調査を行った。調査の結果、調査区の北東部分から4個のピットと遺物集中部を検出した。

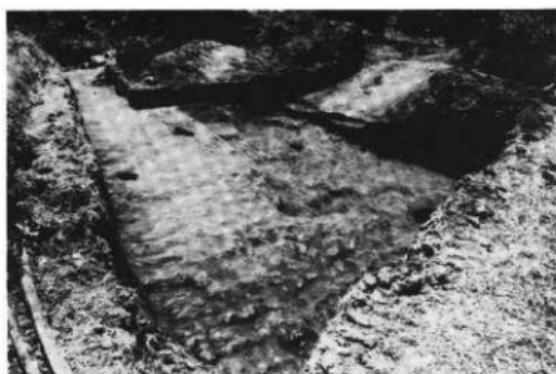
同じくB区では、5個のピットと土壤を一基検出した。土壤からは、縄文時代後期の土器が出土した。どちらの調査区も傾斜地であるため水等の作用により遺物の原位置は失われている可能性は高いと考えられる。



3 X区調査区位置図 (1/2,000)



4 X区トレンチ調査状況  
(南より)



5 A区調査状況  
(北より)



6 B区調査状況  
(南より)

## 2. XI区の調査

### (2) 調査の概要

XI区は、昨年度調査したIX区の東側、五ヶ瀬川に向かって緩やかに下る斜面上に位置している。県文化課の試掘で、ほぼ全域にアカホヤ層が残っていることが確認され、土師器片などが出土した。

調査はまず、調査区全体の表土を重機にて除去し、アカホヤ層を出し、遺構を検出する事にした。途中、調査中央部よりやや西側にかけて、表土の下に黒色土が良好な状態で広がっているのが確認されたため掘り下げたところ、上部より縄文晩期の土器片及び土師器片等が出土した。(8参照)

また、同レベルで焼土の集中部を7ヶ所検出した。(18・19参照)

アカホヤ層上面で検出した遺構には、堅穴住居跡1軒・土塁4基及び多数のピット群がある。(11参照)

アカホヤ層下についてはトレンチにて確認を行ったが、焼石と若干の遺物が出土したのみにとどまった。

### (2) 基本層序

XI区の基本層序は以下の通りである。なお、III層は調査区の中央より東側にかけて削平を受けている。更に、東南部の角はV層まで削られている。

I層…表土層(約10cm)

II層…茶褐色土層(約20~50cm)

須恵器・陶磁器等が出土。

III層…黒色土層。バサつく。

(約30cm) 上部より主に

縄文時代晩期の遺物が出土。

IV層…アカホヤ層(約20cm)

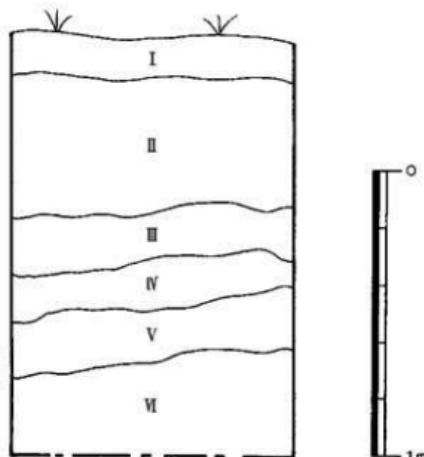
V層…黒褐色土層。やや粘質。

(約20cm) 縄文時代早期

の遺物と焼石が出土。

VI層…黄茶褐色土層。粘質。

小砂利を含む。



7 XI区基本層序

8 Ⅲ区遺物出土状況  
(南西より)

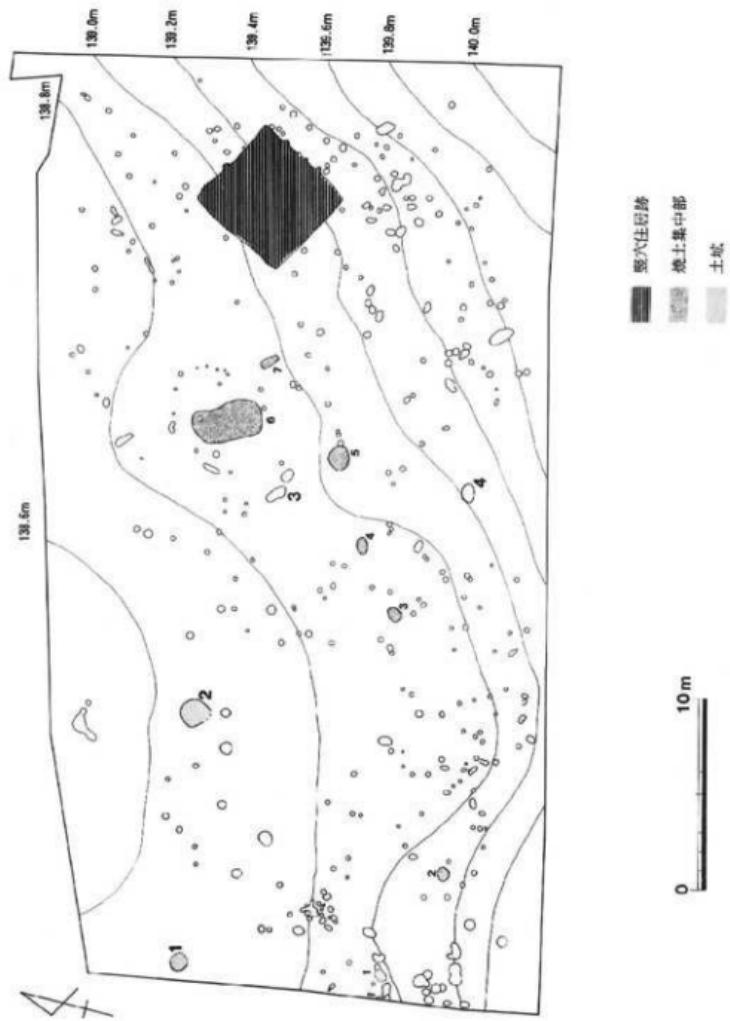


9 IV層上面遺構検出状況  
(東南より)



10 V層遺物出土状況  
(南西より)





11 1:300 1:300 1:300

### (3) 遺構

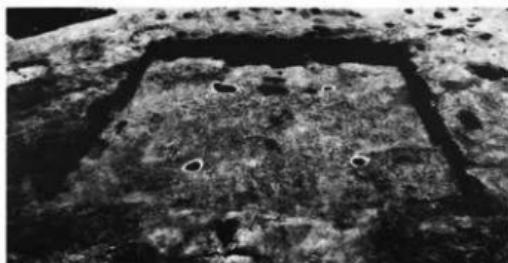
#### 竪穴住居跡 (12~15参照)

竪穴住居跡は調査区の東端付近で検出した。一辺が約5mの方形を呈し、検出面から床面までの深さは約30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦面をなし、貼床は認められない。主柱穴は4本で、床面からの深さは85cm~95cmとかなり深い。壁からの距離は90cm~1.3mを計り、柱間は北側で1.8m、南側で1.6m、南北方向で2mであった。

付属施設にはベッド状造構、焼土、土塙等がある。ベッド状造構は四隅にあり、そのうちの1ヶ所はし字状を呈する。焼土は3ヶ所で、いずれも堆積は5cm前後と浅く、明確な掘り込みを持たない。中央の焼土には直径20cm、深さ18cmのピットが掘り込まれ、壁際上部より土師器片が出土した。土塙は2ヶ所、中央よりやや南側に近接して検出した。中央よりの楕円形の土塙内からは若干の土師器片・高杯の胴部・凝灰岩製の敲石が出土している。土塙内に焼土・炭化物ともに認められない。

出土遺物には、敲石・打製石器・壺・甕・高杯・ミニチュア土器等がある。

1は西側の壁際で出土した楕円形のミニチュア土器である。底部は若干上げ底ぎみで、胴部がやや緩やかに外反したのち、口縁部付近で真っ直ぐ立ち上がる。2は南の壁際、楕円形の土塙

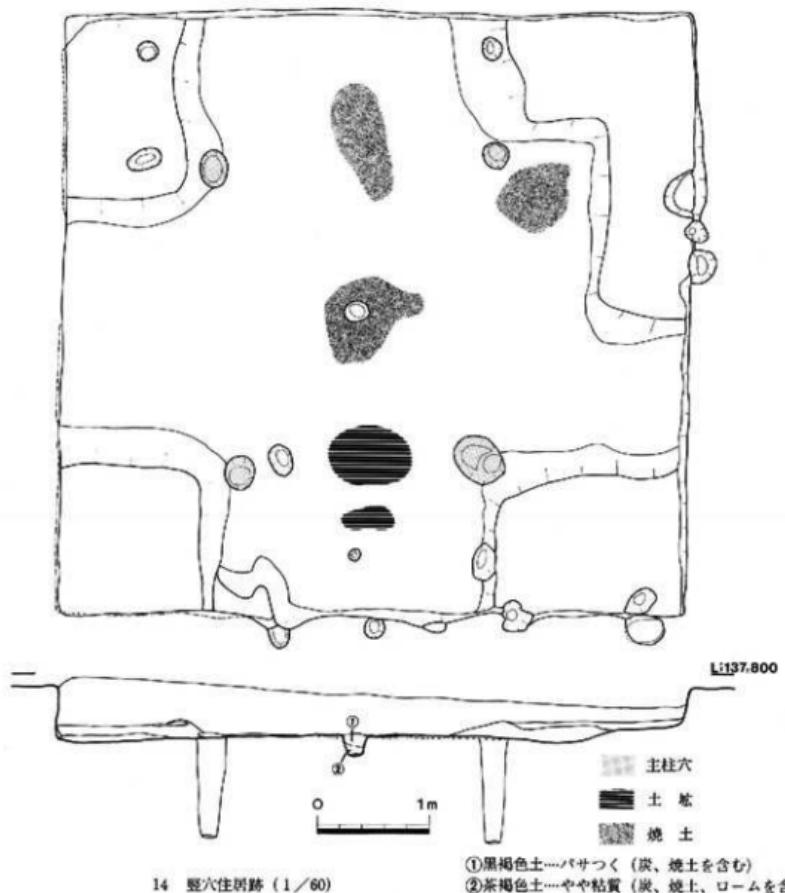


12 竪穴住居跡（北より）



13 竪穴住居内出土遺物

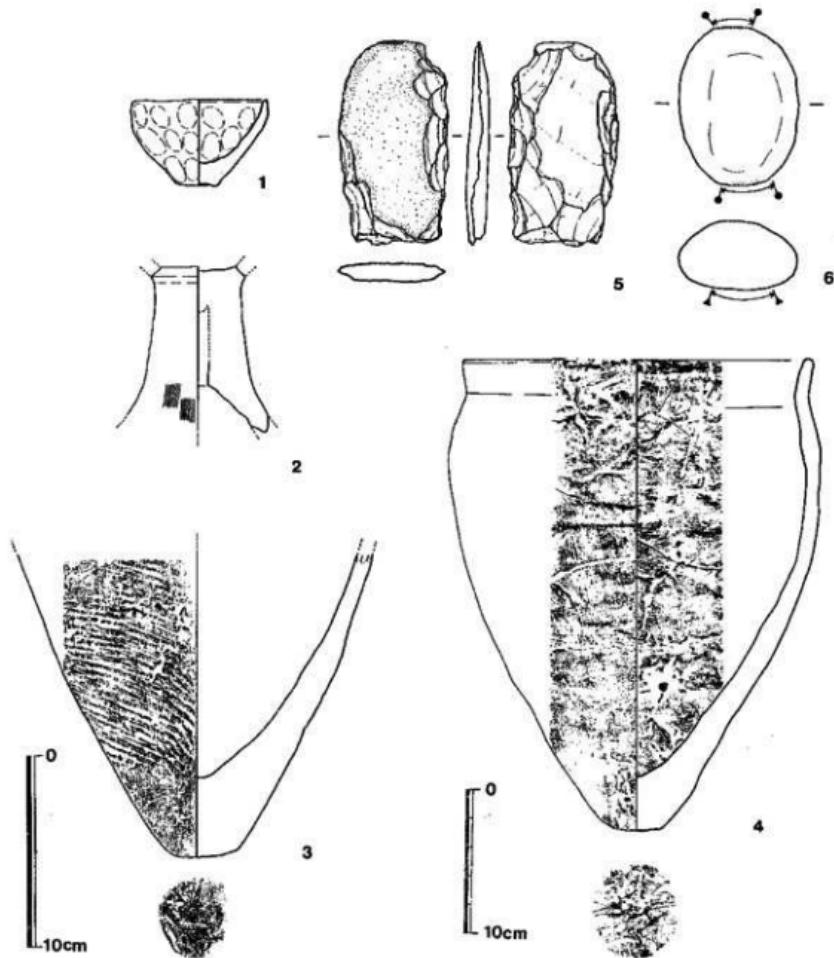
内より出土した高杯の胴部である。全体に厚手のつくりで、焼成も悪い。僅かにハケ目が残る。3はL字状を呈するベッド状遺構と焼土との間の床面直上出土の壺の底部である。底の綾は不明瞭で、下面觀は楕円形を呈す。胴部外面には叩きが認められるが、下半部と底部はヘラ磨きが施されており、縱方向に僅かな綾が認められる。4は甕である。東側の柱穴の間の床面に小破片がかたまつた状態で出土した。口縁部はやや外反する。胴部は余り張らないが、胴部の最大径が僅かに口径を凌ぐ。底部は丸底氣味で、やや段がつく感じでふくらむ。口唇部から胴部中央にかけてススが付着し、胴部の下半部には火熱のためと思われる剥落が認め



14 空穴住居跡 (1/60)

① 黒褐色土……バサつく (炭、焼土を含む)  
② 茶褐色土……やや粘質 (炭、焼土、ロームを含む)

られる。調整は外面の口縁部が横方向のナデ、胴部上半がハケ、下半と底部がヘラ磨き、内面は主にナデであるが一部ハケも認められる。5は頁岩製の打製石器である。半面は大部分が自然面で、弧部に使用痕が認められる。収穫具として利用したと思われる。6は凝灰岩製の敲石である。2と同じ土塗内より出土した。両端に敲打痕が、片面に磨面がのこる。



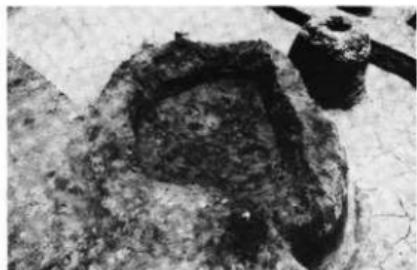
15 積穴住居跡出土遺物実測図 (1~3…1/3、4…1/4)

〔土 坡〕 (16・17参照)

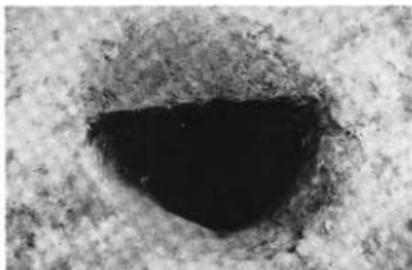
XII区で検出した土坡は5基である。検出面はアカホヤ層上面である。土坡内よりの出土遺物が無いため時期等詳細は不明である。タイプとしては、浅くてやや方形状を呈するもの(2号)と、平面形が円形もしくは椭円形で鉢状に深く掘り込まれるもの(その他)がある。埋土は、2号土坡がⅡ層で他はⅢ層の単層である。

〔焼 土〕 (18・19参照)

Ⅲ層上面より、7ヶ所の焼土集中部を検出した。掘り込みではなく、一部を除き、焼土が若干堆積する程度のものである。焼土内より出土遺物は無い。6号焼土は $3.7m \times 2m$ を計る大型のもので、焼土・炭が厚く堆積する。



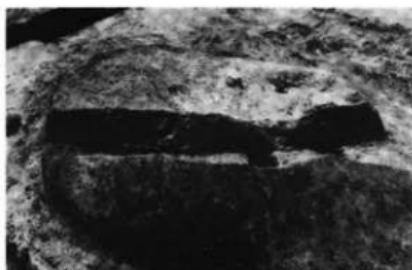
16 2号土坡(東より)



17 1号土坡(西より)



18 5号焼土(西より)

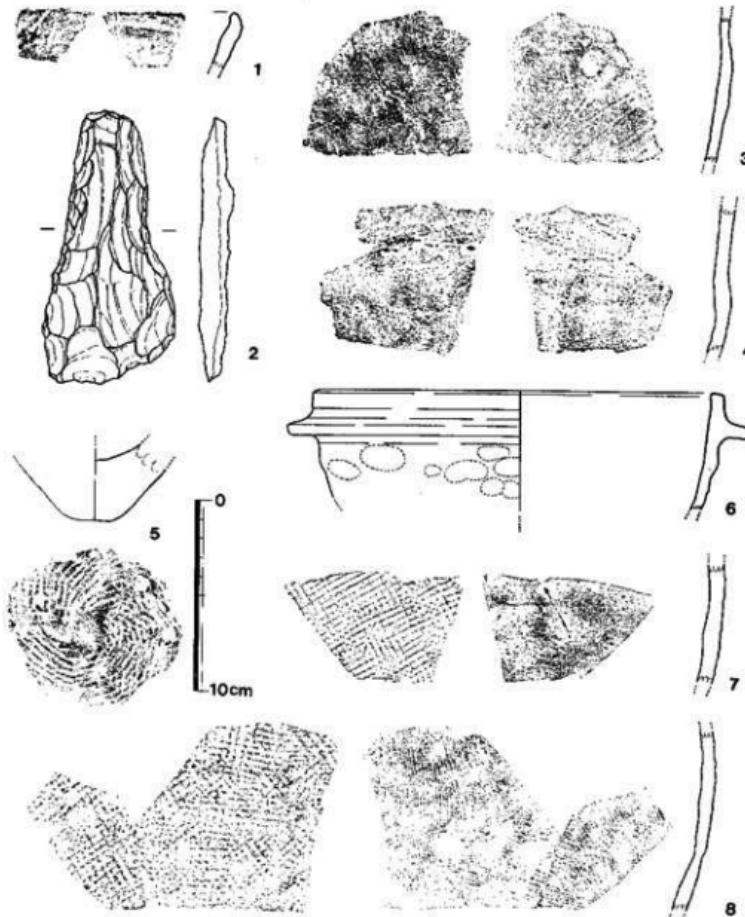


19 6号焼土(西より)

#### (4) 遺物

Ⅲ区では、量的には少ないが、Ⅱ層から須恵器・土師器片、Ⅲ層から縄文後・晩期の土器片・打製石斧、V層からチャート片、縄文土器片等が出土している。(20参照)

須恵器は奈良・平安期のものと思われる壺胴部分(7、8)と銚釜口縁部(6)で、土師器はタタキの残る壺の底部(5)である。縄文後期の土器には三万田式の口縁部(1)が、晩期では粗製深鉢の胴部片(3、4)が出土している。石器には千枚岩製の打製石斧(2)等がある。



20 Ⅲ区出土遺物実測図 (1/3)

### 3. XI区の調査

#### (1) 調査の概要

XI区は、南東に向かって下る斜面上に位置する。東には、平成2年度に国道バイパス建設に伴い、県文化課により発掘調査が行われた早日渡遺跡が隣接する。この調査では、アカホヤ層の下より縄文早期の押型文土器や石鐵・石ヒ・環状石斧等が出土している。

調査はまず、調査区の中央部と北と南に細長いトレンチを入れて土層を確認し、重機で耕作土と底土及び埋土を除去した。中央部から西側にかけて一部アカホヤ層が削除されているものの、東側にかけて地形が傾斜しているため、土層の残りはかなり良好である。

遺構検出は上面で行なったが、ピット以外の遺構は検出されなかった。途中、調査区中央部から東にかけて、埋土の下にXI区で見られたような黒色土が確認されたため掘り下げたが、縄文晚期の土器片が若干出土したのみである。

アカホヤ層の下には縄文早期の包含層が2層確認され、集石遺構18基、粗石遺構（仮称）3基を検出したほか、多量の遺物が出土した。

#### (2) 基本層序

XI区の基本層序は以下の通りである。

I層…耕作土（約20cm）

II層…底土（約5cm）

III層…埋土（10~80cm）

IV層…黒色土層（約5cm）

パサつく。

縄文時代晩期の遺物が出土。

V層…アカホヤ層（約20cm）

VI層…黒褐色土層（約20cm）

やや粘質。

縄文時代早期の遺物が出土。

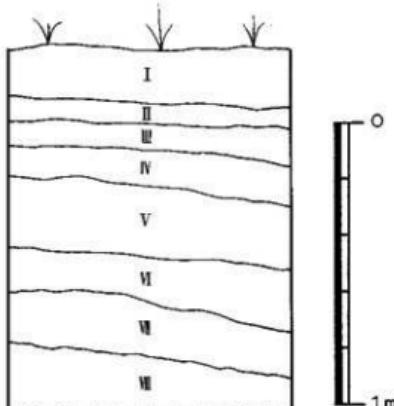
VII層…黄茶褐色土層

やや粘質。

縄文時代早期の遺物が出土。

VIII層…黄茶褐色土層

粘質。



21 XI区基本層序

22. III区遠景

(北より)



23. V層上面遺構検出状況

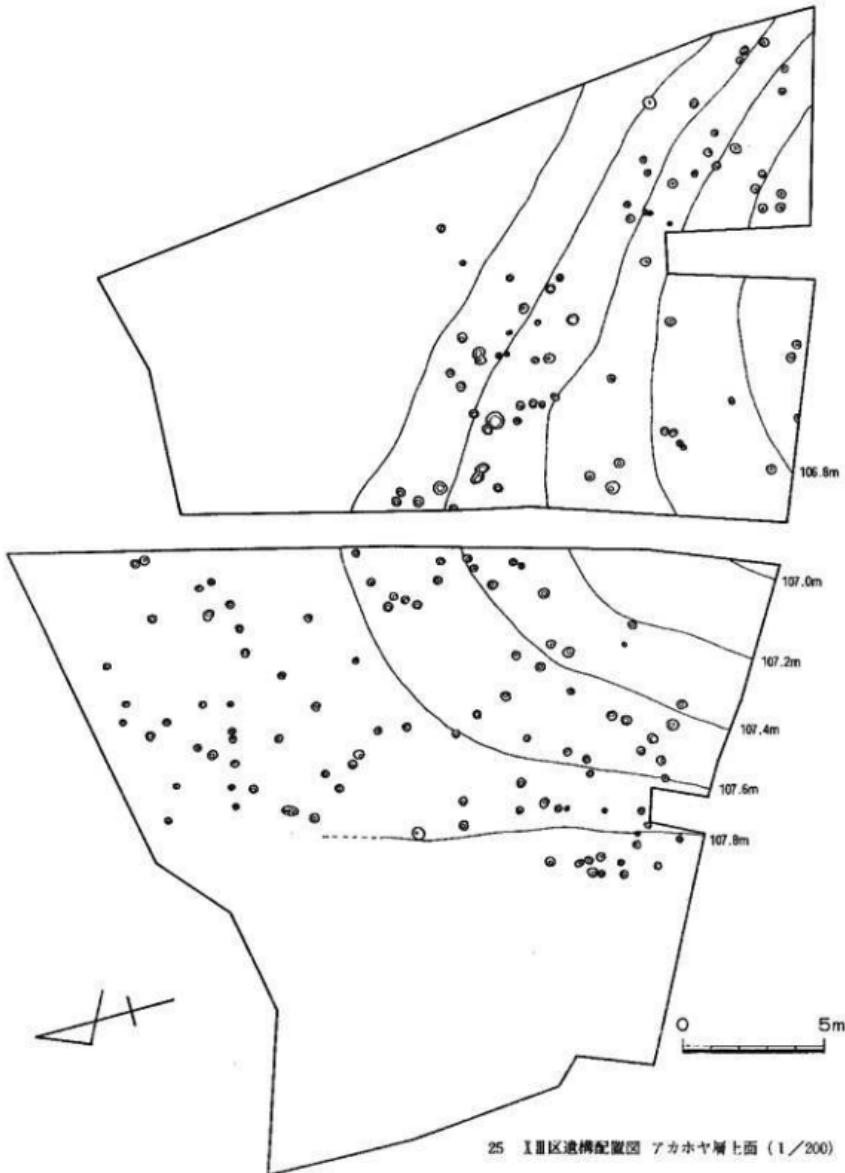
(東より)



24. VII層遺物出土状況

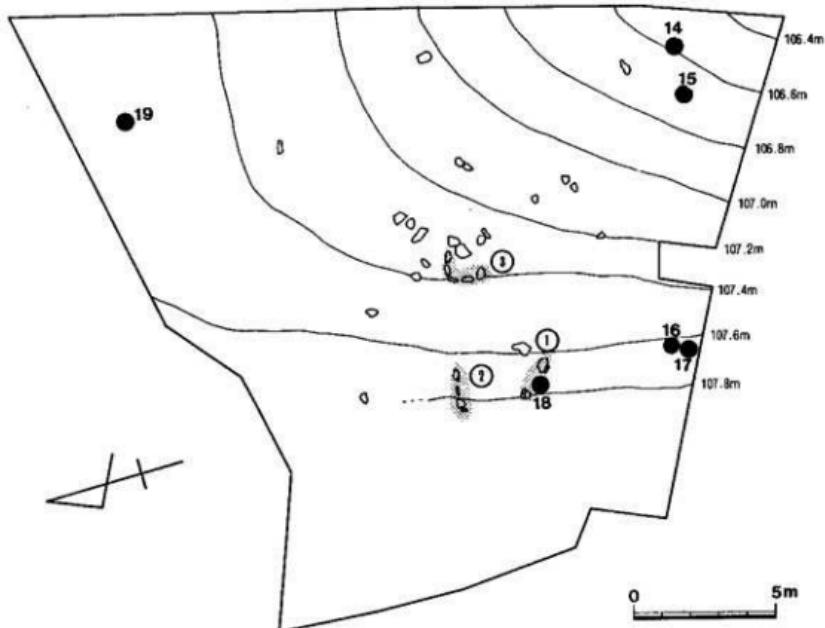
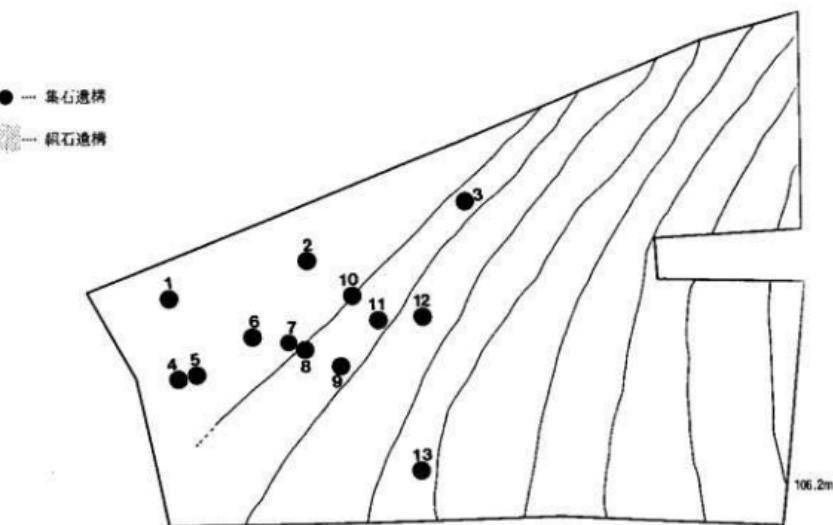
(北より)





● … 集石遺構

○ … 砂石遺構



26 III区遺構配向図 墓塔 (1/200)

### (3) 遺構

#### 組石遺構 (27~35参照)

アカホヤ層を除去し、黒褐色土層を掘り下げる段階で、千枚岩や凝灰岩を意図的に並べた(或いは組んだ)と思われる遺構が3基検出された。これを、「組石遺構」と仮称していくが、基本的に石を立てて並べて(或いは組んで)いるもののみとする。

いずれも、並べた石の周間に掘り込みを裏づける土質の変化などは確認されなかった。

また、組石遺構の周辺に土器等の集中は見られず、掘り下げていく段階で若干の剝片や土器片が出土したが、<sup>7</sup>層内出土と把握できるものである。

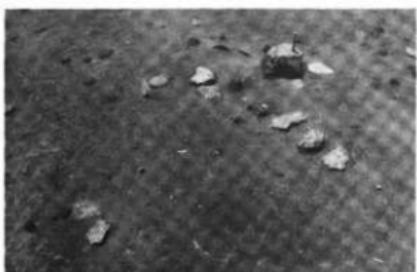
1号組石遺構は、調査区の西側にあり、18号集石遺構に近接している。柱穴により擾乱されており、わずかに千枚岩の板石が一つ立っているのが確認されたのみである。18号集石遺構も敷石を除いて上部が削平されており、組石遺構との関係は不明である。

2号組石遺構は、1号組石遺構の西側約3mの所にある。つの偏平な千枚岩をほぼ一直線に立てて並べている。

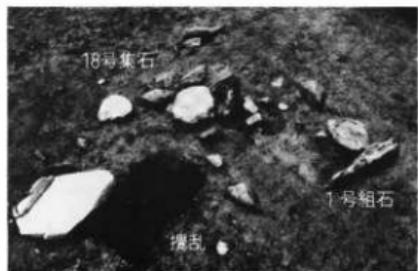
3号組石遺構は、2号組石遺構の東側約3mの所にある。千枚岩と凝灰岩の板石L字状に組んでいる。2号組石遺構と比べ、その幾つかはくっついている。



27 2号(手前)組石検出状況(北より)



28 3号組石検出状況(東より)



29 1号組石遺構(東より)



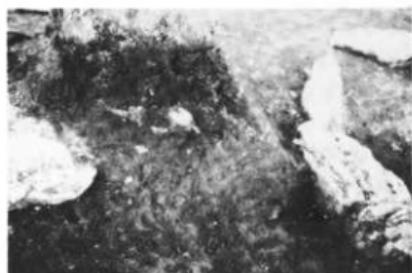
30 2号組石遺構(東より)



31 3号組石検出状況(東より)



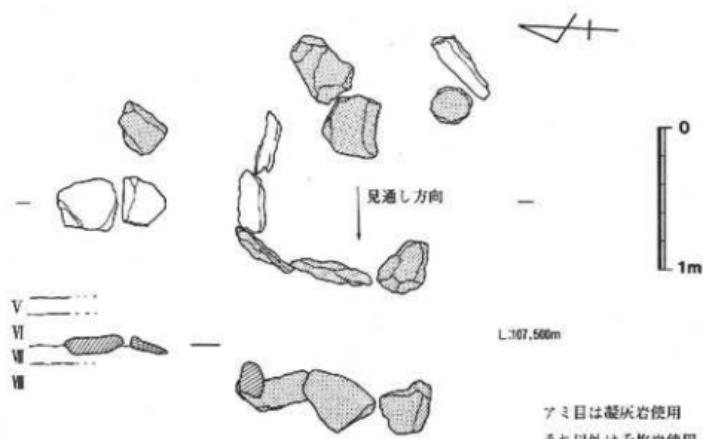
32 3号組石半載状況(西より)



33 3号組石土層拡大部分(西より)



34 3号組石土層拡大部分(南より)



35 3号組石造構実測図 (1/40)

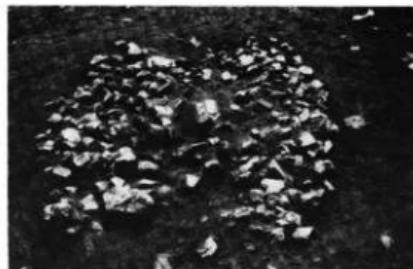
### 集石造構（36～41参照）

Ⅲ区ではアカホヤ層を除去しⅣ層を掘り下げていくと、大量の遺物と一緒にその数倍の焼けた石が敷きつめた状態で出土する。その中でも更に焼けた石が集中する部分がある。これが集石造構で、焼けた砂岩や千枚岩の角礫を除去すると、その下から偏平な石を花弁状に配した敷石や掘り込み等が検出される。Ⅲ区ではこの集石造構を19基検出した。そのうち近接するものが3ヶ所ある。集石造構は調査区の東端に集中するようである。

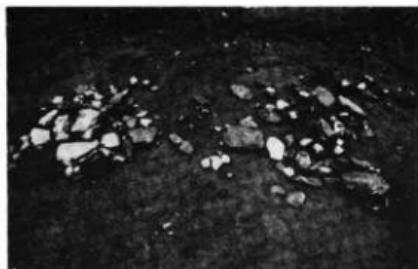
集石造構は、全て掘り込みを持ち、埋土に炭・焼土が含まれる。2号集石は特に、炭を多量に含んでいる。集石規模・掘り込みの大きさは直径1m前後のものがほとんどで、集石規模の最大のものが15号集石1.9m×1.3m、掘り込みで14号集石1.4m×1.3mである。掘り込みが一番深いのは5号集石の31cm、反対に浅いのが10号集石の7cmである。

敷石を持つ集石は11基と半数以上を占める。中央に大形の偏平礫を敷きを周りにやや小さめの偏平礫を置くもの2例、ほぼ同じ大きさの礫を浅い皿状に配置するもの9例である。

遺物が出土した集石は11例で、そのほとんどが押型文・より糸文・条痕文土器等である。石器は3号集石より砂岩製の敲石が2点、4号集石よりチャート製の小形石器が出土したのみである。



36 1号集石検出状況(南より)



37 左4号集石・右5号集石検出状況(西より)



38 1号集石・敷石検出状況(北より)



39 2号集石・敷石検出状況(西より)

#### (4) 遺物

Ⅳ区で出土した遺物は総数千点をこえるが、そのほとんどはアカホヤ層の下より出土した縄文早期の土器と石器で占め、早期以外の遺物は僅かである。ここでは代表的な遺物を取り上げ、詳細は本報告に期す。

土器は押型文土器がほとんどで、それに量的には僅かだが、より糸施文の土器類・貝殻旋文の土器類及び無文土器・爪形文土器等が伴う。石器のほとんどは、チャート製の石鏃や小形石器で占められ、流紋岩製の剝片石器や砂岩製の礫器・敲打器は少ない。その他、古墳時代の須恵器や中世の土錘・青磁片等が出土している。

#### 石器 (45・47参照)

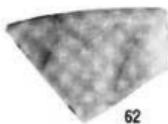
1～4は石鏃である。4は両側に抉りが入る。5～7は用途不明の小形石器である。8～11は石錐と思われる。9はスクレーパー的な要素も強い。12・14・16はスクレーパーである。12にはつまみを意識したへこみが、14には抉りが見られる。13は先頭状石器と思われる。15は使用痕が見られる剝片である。打面を残す。17は旧石器時代のものと思われるスクレーパーである。打面を残す。Ⅳ層より出土した。18は敲石で側縁の全周に打痕が認められる。19は礫器である。片面はほとんど自然面が残る。石材は1が安山岩、2・5・6・11が黒曜石、15・17が流紋岩、17が角閃安山岩、18・19が砂岩で、あとはチャートである。

#### 土器 (45～47参照)

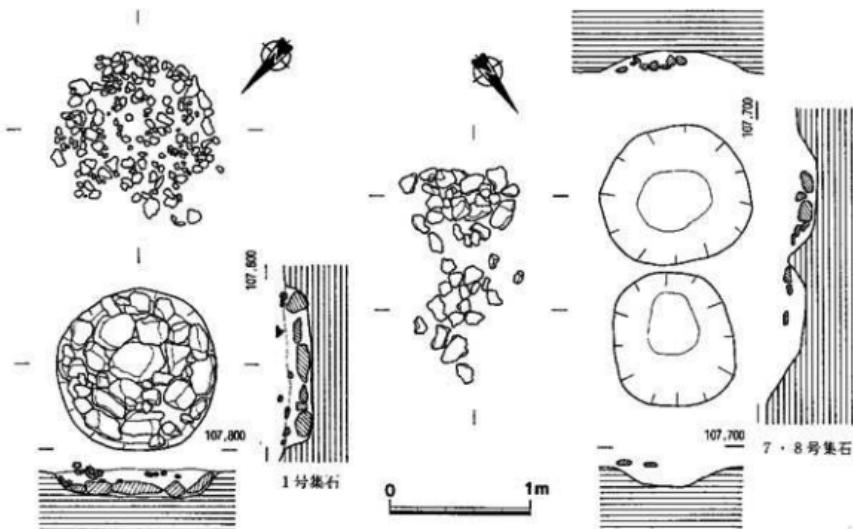
20～34は押型文土器である。山形及び楕円文が大半を占め、格子目文は少ない。表が縱方向で裏に横あるいは斜め方向の施文をする例が多い。大体、手向山期に属するものと思われる。35～36・38～39・41～43・53はより糸を施文具に利用した土器である。37・49～52・55は櫛歯状工具を利用して施文したと思われる土器である。44～46・54は貝殻を施文具に使用した土器である。40無文、47は爪形文土器である。48は貝殻による地文の上に刻み目の入った突帯を縱方向につけ、突帯から斜め方向に棒状工具で線を引いたり刻み目が入れられている特異な上器である。施文方法・胎土等は南九州的であるが、熊本で類似例が出土し、「天童ヶ尾式」と呼ばれている。<sup>注1</sup>

#### その他の遺物 (47参照)

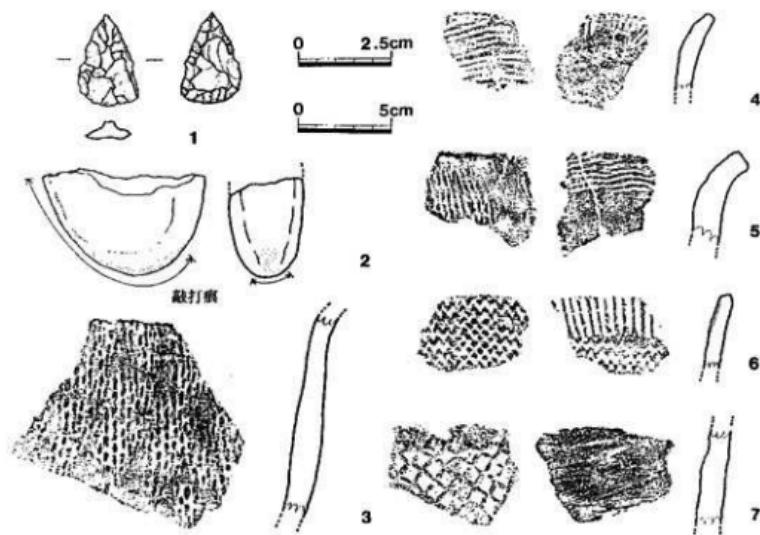
56～59は須恵器である。56は蓋、57・58は杯、59は甌の胴部片である。59と57は5世紀後半から6世紀初頭、58と59が6世紀中頃から後半のものと思われる。<sup>注2</sup> 60は土錘で焼成は良好である。61は砂岩製の砥石である。62は青磁碗片である。口縁が直行すること、剣先蓮弁を持つことなどから14世紀後半から15世紀前半頃のものと思われる。<sup>注3</sup>



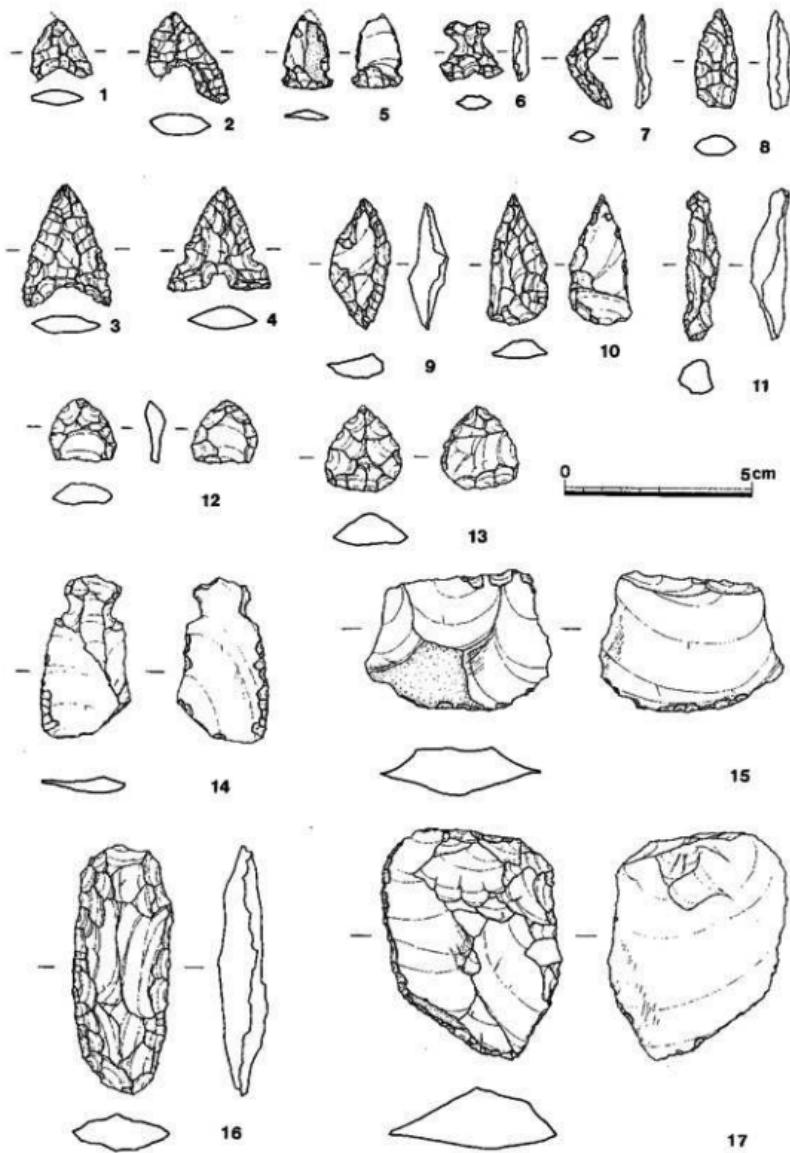
42 青磁碗片



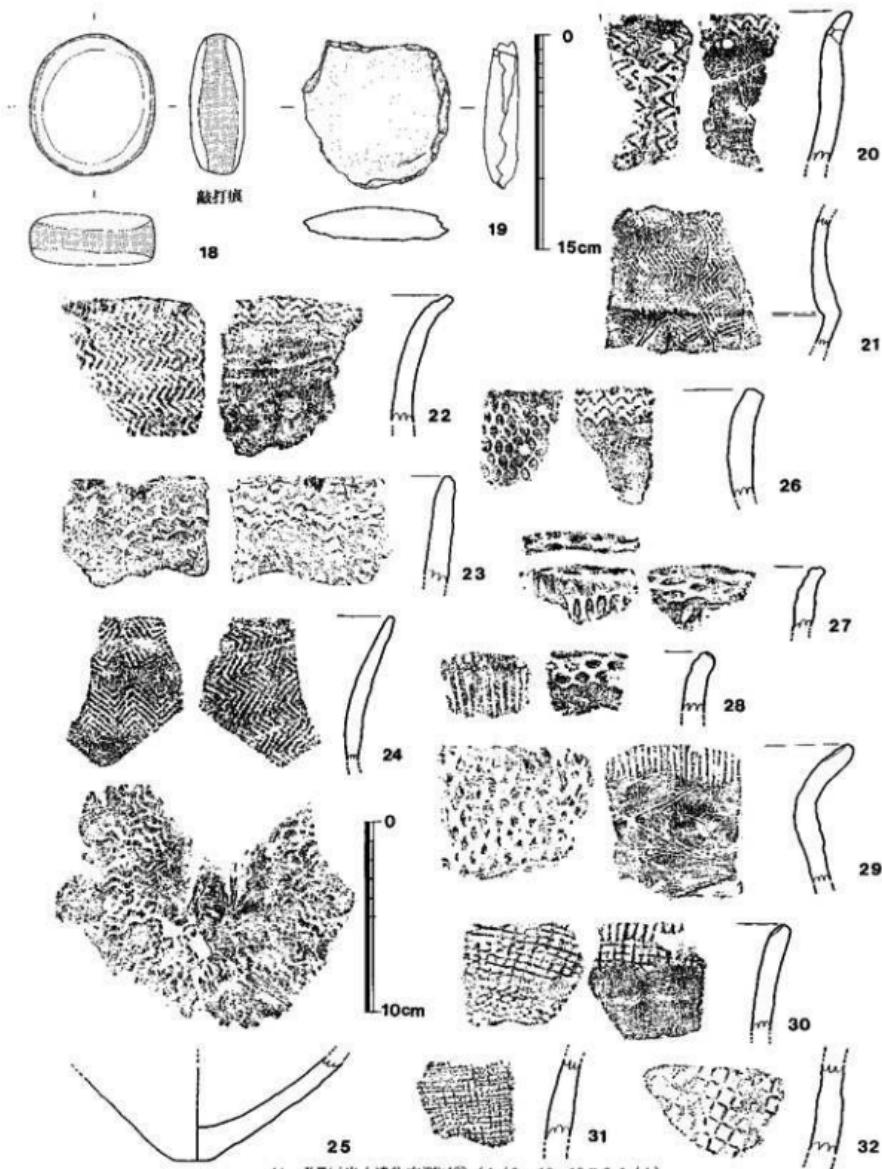
40 I II区集石遺構実測図 (1 / 40)



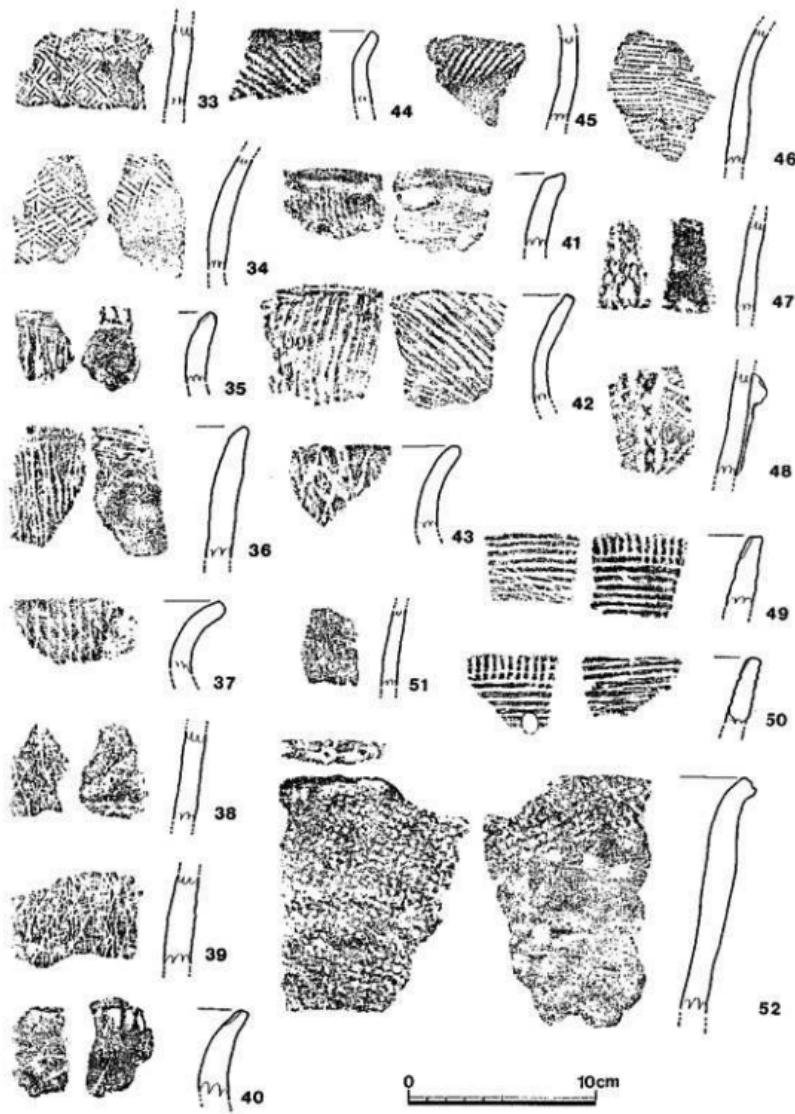
41 集石内出土遺物実測図 (1 ~ 2 / 3, 2 ~ 7 ~ 1 / 3)



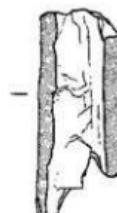
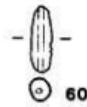
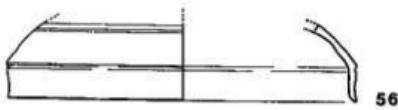
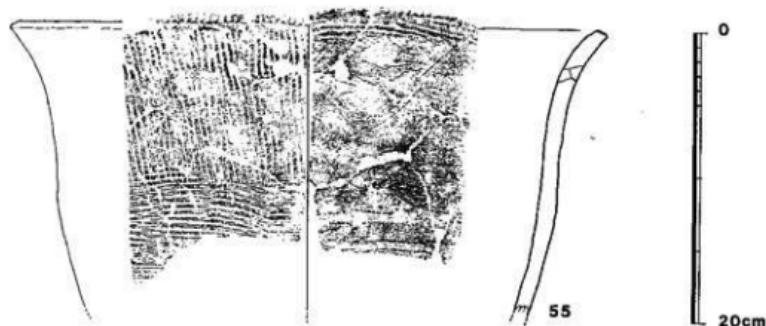
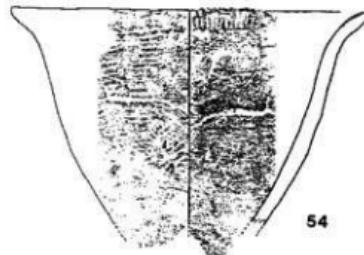
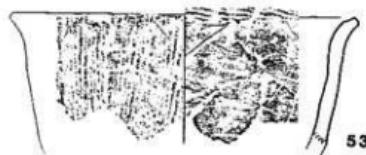
43 III区出土遺物実測図① (2 / 3)



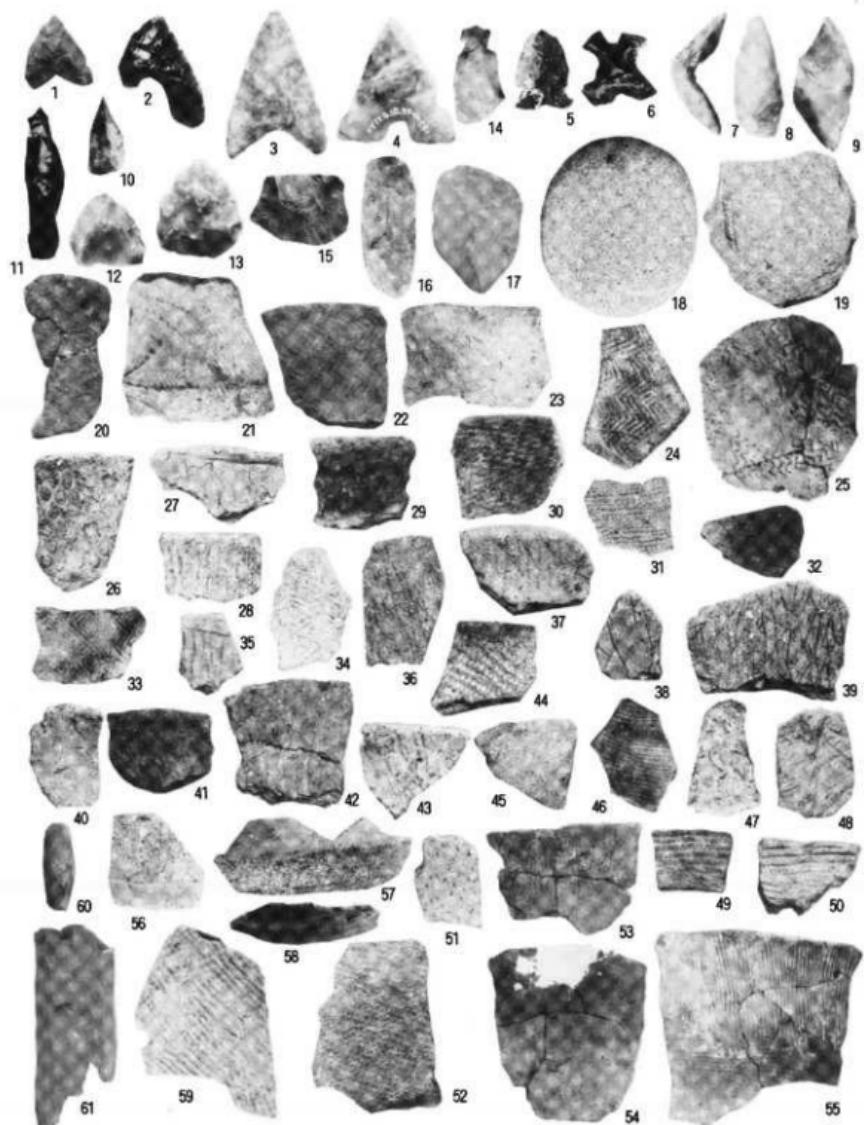
44 III区出土遺物実測図② (1/3、18・19のみ1/4)



45 XⅢ区出土物③ (1 / 3)



46 III区出土遺物実測図④ (56~61…1/3, 53~55…1/4)



47 III区出土遗物

### III. おわりに

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒、集石遺構18基、組み石遺構（仮称）3ヶ所等である。遺物は旧石器時代から中世にわたって出土しているが、ほとんどが縄文早期の土器・石器で占められている。

旧石器時代の遺物集中箇所は今回も検出されず、縄文早期の遺物に混じって数点の石器が出土したのみであった。しかし、現在五ヶ瀬川を挟んだ対岸の矢野原地区で県文化課による発掘調査で、良好な包含層が見つかっておりその成果が期待される。<sup>注4</sup>

縄文時代では集石遺構を18基、組み石遺構3ヶ所を検出した。また、縄文時代早期の遺物が新知見の資料を含め大量に発見された。当地域の集石遺構は、Ⅶ区・Ⅷ区の2ヶ所で検出されたのみであり、しかも比較的近い位置にありその関係が注目される。また、平中区では焼け石が断片的にではあるが出土しており、この地域で集石遺構が新たに発見される可能性も高く、その対応には十分な注意が必要である。組み石遺構の周辺には、焼け石や遺物が集石遺構周辺より少なく、位置関係や性格的なものも含め注目される。組石遺構は集石遺構と共に、今後縄文時代早期の研究を進める上で重要な遺構と思われるが、現在のところ県下でも報告例がなく、熊本での発見例も正式な報告が出されていないため、詳細は今後に期したい。

当地域における弥生時代～古墳時代に属する住居跡の発見例は、Ⅶ区の住居跡で13例である。Ⅷ区の四隅にベッド状遺構を持つ住居跡は、当地域では初例であり注目される。最近、五ヶ瀬川流域における弥生時代～古墳時代の住居跡の調査例が増加しているが、個々の住居跡の構造的解明はもちろん、立地条件や生産基盤を考慮に入れた総合的な関係についても今後さらに追及すべき研究課題であると言えよう。

古代については遺構・遺物共に断片的で少なく、不明な点が多いのが実状であるが、今回初めて奈良～平安期に属する遺物が出土したことで、これから調査にも期待がもてる。

県営ほ場整備事業に伴う速日峰地区遺跡の発掘調査は今年で2年を迎えるが、一連の調査によって新資料や新知見がもたらされ、これまで空白地帯だった当地域の歴史の解明に大きく貢献している。今後、周辺地域を含めその対応には十分な注意が必要である。

22頁注1 熊本県文化課木崎康弘氏の御教示による。

\* 注2 宮崎県文化課長津水重氏の御教示による。

\* 注3 日向市教育委員会緒方博文氏の御教示による。

28頁注4 宮崎県文化課山田洋一郎氏の御教示による。

## 速日峰地区遺跡Ⅱ

発行日 1992年3月30日

編集・発行 北方町教育委員会

印 刷 クラフト印刷  
宮崎県東臼杵郡北方町子4146  
電話(0982)47-3210番